

平成 25 年度 大学院工芸科学研究科 入学宣誓式（秋季）
学長告辞

本日ここに入学宣誓式を迎えた 大学院博士前期課程 13 名、博士後期課程 22 名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。

今日、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びであります。新入生の皆さんは、希望と喜びをもって、今日の入学宣誓式に臨まれたことと思います。

京都工芸繊維大学は、理工系の単科大学であり、科学と芸術の融合を目指して教育研究活動を行っています。大学理念を大胆に簡略化すれば、知と美と技、そして学風の底流に流れる京の四文字に縮約することができます。我々はこのキーワードが指し示す方向に向かって活動の舞台を整え、3つの学域と2つの独立専攻を設置し、大学個性を伸長するべく、教育研究活動を展開しています。

洗練されたモノづくりを行い、それを文化にまで高めてきた京都の地の利を活かし、いま京都工芸繊維大学は、グリーンイノベーション、ライフイノベーション、カルチャーイノベーションの3つの領域において、実践的なモノづくりを通じて教育研究を行っています。しかしながら、今日、日本の研究力が低下してきています。これは、文部科学省や民間企業も心配しているところです。研究の最前線は、皆さん方、大学院生と教員の共同作業の場にあります。日本の研究力強化のためにも、是非大学院生皆さんのご尽力と野心のある活動を期待しています。

本日の入学宣誓式にあたり、学長より、新入生諸君に申し上げたいことは、研究力強化を図るためには、大学院における教育が大切であること、しかも、狭い範囲での専門分野の教育力ではなく、むしろ大学院におけるリベラルアーツこそが、日本の研究力向上や総合的な国力増進に寄与するということでもあります。

平成26年度からは、京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の三大学は、教養教育を共同実施します。このために様々な議論と改革が行われていますが、学部における教養教育の議論は、大学院生が身につけるべき教養とは何かといった議論を引き起こしました。かつて教養教

育は学部低学年で習得する科目群とされてきました。しかし私たちは、教養とはそもそも大人が身にけるべき学識であること、大学卒業・修了後の人生の基盤を形成する何かであり、知恵や賢さ価値判断の癖といった人格形成に深く関与する何か、個別の体験や習得した身体的技能を言葉で表現できる能力、さらには、こうしたものが渾然一体となって主観的な好みを形成する核あるいは触媒のことを教養と呼びたいと考えています。

我々理工系大学において、リベラルアーツの幅を広げるためには、文系の学問領域を参考にして考えることが有効ではないかと思われま

す。一般的に言って、大学における学問とは「一定の対象領域に関する普遍的な記述を与えること」に他ならないと言われます。普遍的な記述によって、対象の操作可能性や制御可能性を得ることができる。この手続きを経て、学問は閉じた領域から社会的な実践性の機会を得ることができる。大学における知的活動が、社会に流出していくためのキーワードは「普遍性」である。特に理系の学問分野は、数学における数式という言葉、コンピューターにおける人工言語によって形式的な普遍性を保証されているかのように見えます。

一方、文系の学問分野ではどうか。文化系の学問領域では数式による記述にはなじまない主題、数量化し得ない対象にこそ関心が向けられています。数量的な取り扱いを拒否し、数量化にあくまで抵抗する対象とは、何か？ それはもちろん人間であり、人であります。人間あるいは人間が作り出した文化事象、社会現象、歴史などは数式に還元されない多元的な対象であり、実験や再現性にも馴染まない事象です。

文系の学問は、理科系の学問に比べて、より主観的で、非・科学的に見える。文化系の学問は、純粋な形式言語ではなく、日常的な自然言語の中に根付いている。このことは、文系の学問のもっとも大きな特徴であります。

一方、理系の学問分野では、ゲーデルの不完全性定理に代表されるように、形式化の限界が示されている。我々の時代は、学問の主体は、対象から客観的な距離をとることが困難な時代です。学問する主体は、歴史的な文脈あるいは固有の文化基盤にすでに組み込まれていることを認識すべきです。

このように大学における学問のあり方を、文系と理系に大別してみていくと、理系では自然や物質を研究対象とし、唯一普遍の真理への到達を目指すのに対し、文系の研究対象は、突き詰めれば人間であり、研究者は研

究対象に関して客観的な立場をとることが困難であり、解の多様性を前提として研究を行うことになる。したがって必ずしも、当初から唯一普遍の真理を求めて研究を行っているわけではないのです。

ここで再び、大学院における教養教育というものを考えてみましょう。

教養は、自分にとってどうしても気になる事柄、簡単に答えは出ないかもしれないがわかりたい事柄、長い時間をかけてつきあう価値のある問題、こうした課題、問題との出会いから始まるのではないのでしょうか。

教養とはおそらく、他者を説得するための成果ではなく、自分にとっての真理を発見する作業のことではなかろうか。

いま社会から大学に求められているモノ、それは大学の使命である教育・研究に加えてこれまで第三項の位置にあった社会活動です。大学にたいしての期待が非常に高まってきている社会貢献とは、旧来のボランティア活動のようなモノを指すではありません。

社会貢献とは、「COC」、「COI」、「国際貢献」の3つの明確な内容を意味しています。COCとはセンターオブコミュニティのことであり、大学は地域の核となれというメッセージです。COIはセンターオブイノベーションの略であり、大学には産業振興の核となることが強く求められています。さらには国際貢献に関しては、本学はアジア、北部ヨーロッパに注力して交流を行っていきます。

今日から行われる研究室での諸君等の教育研究活動が、時には大学の大きな活動方向と同じベクトルを持っていることを確認しながら日々の実践を行っていただきたい。そして、専門知識を動員するだけではなく、自分にとって困難な問題、一生かけて取り組むべき問題に出会うことを期待しています。そして本学における教育研究を通じた経験のすべてを、人生の価値として、自らの知的財産として自分の中に登録されることを期待します。

諸君らの大学院における学生生活が実り多きモノとなるよう、皆さん方の活動によって、本学の研究力の向上、ひいては人間社会の知的財産が豊かになることを、念願しています。

平成25年10月1日
京都工芸繊維大学長
古 山 正 雄